芳雲枕言葉

和書門
二五三一六
六八
二 一
冊 架 函 號 類

内閣文庫
二五三一六
二〇〇
二 三
冊 架 函 號 類 和書

國書百二

和歌

内閣文庫
番號 和 25316
冊數 2 (2)
函號 200 210

国立公文書館
National Archives of Japan

歌書抜書下巻目録

浅草文庫
和學講談所
内閣文庫
帝國圖書館

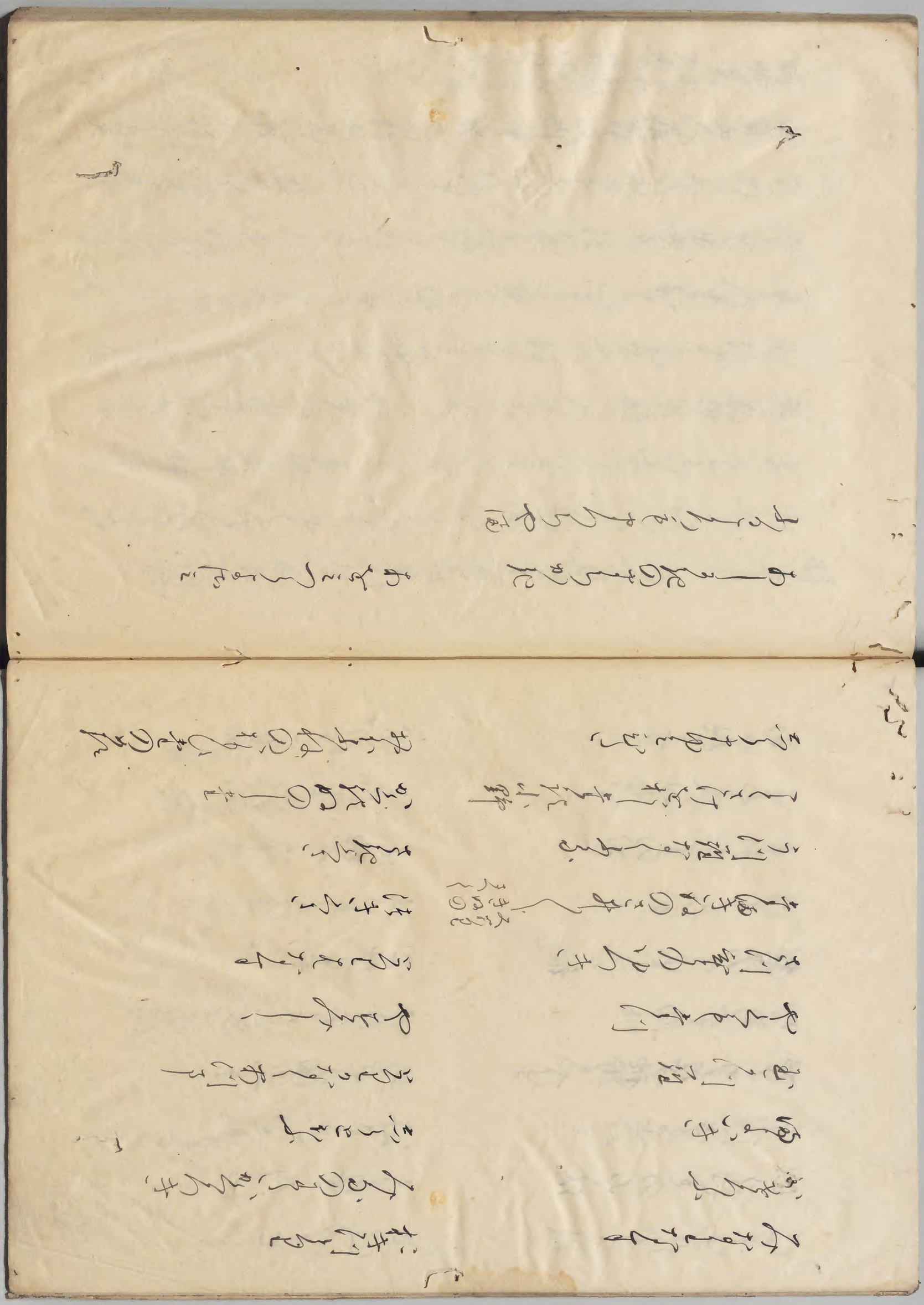
ゆふさのはま
松柏のさゝへ
あかきれ人
たたなはるあをかきゝ
いそかねのこゝし紀
ちゝきえの袖
おもかも称のゆ
越きりとかも称
ちゝきとふかつら城
つな嶺垂やまゝろ
きゝちゝ称
ちゝき者へ
きゝなけを
ゆきすき懸
おもきゝれらかさの山
すゝね側隠
おまゝかるゝ
ものゝとゝこのかけ紀

おしかるれとうた
ぶんたな
うりはあさをはと
じまさうを神なし
こ酒つるき和
焼そらの酒ふ
はるきそらはと
おかはま
ぶとかこのとか
とあんなうさうし

さ称かうら今酒
たまそれ
むまさうの三鶴付三宝
はるそきらさう
やきそらを力
むつるきやまき
はるきそらこ
むを画見
たくはのスきくふ酒
おきかしま酒又朝柏

あねさす
たや人のさつま
れうとのおき
ううこわし
かきあこうとの和
かんを酒
おとり紀り神ふやま
こふさうて
ぶうきとのふ酒
ふくなを

いそれのこふる
ふるとれかつしう
なれふう
ふなとのはくん
こゆき
きてなそいつこの河
ちきし酒のやまと
みさこいふ
そうはこうりやまと
さいつなを



国立公文書館
National Archives of Japan

葛草妻　萬葉集第十一巻柿本朝臣人麻呂旋頭歌

おもよりのうひ川きりたちしらゆきのたえんわかこさん

妻うるとしよおしをうゆこ　喜撰式云婦葛草と

興義抄云婦乃夫名なり　仙覺云葛草ハ婦と云こ

とはまこと云ハ　つハはくこと云詞まハ中とわかと云詞なり

葛乃生ハていまこ葉をひろ　きうらふきかへすといし

ゑとも男女もはなれまゐとりしてたゆまぬ事なり

たわのうらこまきとも　てはまと云也　畧日本紀第十五雄略

我有女人在難波御津哭之曰於母兄於吾亦葛草吾夫

何怜矣　釈云私記曰所謂古者以葛草喻夫婦故以葛草為夫

次嶺經山背　同集第十三卷問答歌　つぎねゝ山をこゆるの
あらをとこ[illegible]ゆくさのつゝのらまゆを
いかるこに祢のうらなしなりて　千略之　日本紀第十一卷云皇后
至山背河而歌曰菟藝泥赴揶蓁之呂餓故烏箇破紀明利千略之
釈日本紀二十五卷云菟藝泥赴揶私記曰邪說歌讀山城之祭
語也泥者山也菟藝泥赴揶蓁之呂餓也言山相繼也と　或人云此今大倭
國陰陽二神寂初産此國而以我國之總名号之耶麻
此山跡也号其山之背國謂揶蓁之呂揶蓁之呂去山背
也　拾芥抄云山城國元山背延暦十三年七月改山背為山
城源唱朝臣為重任之間奏河陽離宮為國府

松柏乃作槇延　同集第十九卷為家婦贈左京尊母
所誂作歌　上略之　ゆくへのさこのいまさねたうともあの
君云云今按論語子罕篇云歲寒然後知松柏之後彫
也作槇延有榮也

常乳根　同集第三卷天平元年己巳攝津國班田史
生文部龍麻呂自經死之時判官大伴宿禰三中作歌　上下略之
なにしかもかくのみしかるをとこらはは
ひとりをあらねの母のみといはんをとこ
はなくてひとりをはゆくらんとこ
ろやゆきとゝまるかをとこ
ろをはかきくもとゝ天

世の中をうしのと　同集第十一巻正述心緒歌　無記
根の無しなきてうくもわすれんなきことにいまもせなく
よ　後撰抄云　をとこ　父をもち祢ハ母　奥義抄云父
をハきうちを母をハきたちをいとこ　をとこ　をとこ
きうちねとうかゝわきてしたうち祢ハすんてゆやの
名なれハ父をも母をもいとんよこのなし　今按萬葉集の
中無乳根といひてハ母をいへり　父とよめる尺なし
ひなるこゝろなし　示たゞしと云ものしゆや
同集第五巻筑紫國月守山上憶良敬和為熊凝述其志長歌
うちひさすゝへのうちと多羅知新やハいかゝ　（ハ味之）　同

短歌　多良和遅の母の国ゝそなてはわゝしくいつちむ
きてのあうゝ　ゝ　ゝ　ゝ　云云
為遅之久　同集第四巻相聞柳本人麻呂歌　ゝ　ゝ　ゝ
神振山のうゝきのひさしきもたゝひきこれハ　奥
義抄云　うゝきはくしゝよ　ゝ　ゝハ皮垣ハ神ゝ　ゝ
垣なまゝハ神ハ　ゝ　ゝハいゝ　ゝハ皮垣　ゝ　ゝ
ことにしなり　同云高野姫の天皇難波ゝ　ゝ
時左古ゝの奉歌云　堀江ゝハ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝこゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
神ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　若云皆垣ハ

垣内ようしこくハ行ふ垣なれハ神の御前を
ゆ紀いふもの法舞を作なんが幸ゆよりかりまた
三舞といよりも也又ふしの紀物よりつくいたして
ハ雪ハ雪御抄云ふ
神殿也　一書云ふりまとい宮ハ宮の訓也神垣ハ
事を云也　仙覚云ふ垣といハ神社の墻籬なり神ハ
おまもるを事なりて垣ひて垣久しけ也いひ垣也
と云し　今按須和名云日本紀云瑞籬俗云美豆加故一云以加伎
俗清輔抄仙覚説ハ府合抄　加之續日本記巻四十
巻云延暦十年八月幸伊勢大神有造焼伊勢大神

宮正殿一宇御門三間瑞籬一重云云日本記第一巻
云板及櫛代此雨樹者可以為浮寶檜可以為瑞宮
之材　釋日本記云瑞宮玉殿也と然玉殿と籬とハ
又差別ありハまたしかし　示説文云瑞以玉為信也以玉
常殿又符信也　又嘉祥符應曰瑞　禮記云神器曰瑞
敷紙　同集中三巻天平七年乙未大伴坂上郎女悲嘆
尼理願死去歌　うつせみの命ハしらぬ敷紙の
家を出て雲ゐ隠ぬ　同集第四巻相聞駿河
妹女歌　たまきはる命の極をさ小深ゆうきねとし
けりこひのつもりて　同集同巻田部忌寸櫛子任

古事時歌　地名にいう妹らひしひしと女仲の
ちりうと数てなり紀氏長歌と　同集第五巻癒男
子名古日長歌（上下略之）わりこうの日はあのうりのあんくあし
ハしきさへ乃床の上ゆ況たてれとも　同集第十一巻
寄物陳思歌　ちまたゆのこゆほうれて動もなるなしきの
ひとんわとやりこそよ　奥義抄云數妙といふうりれ
ていれとよりあれとも庭こもとしたえ
ひりてのをいちき妙とししりや又数妙の衣ともし
き妙乃ちり髪数てとも　数妙の和ちわもてしとよめと
仙覚云（上略）ちきと云ハ三けしと云詞をへいはしりしなな

きハ法師よきへなわといたんゆよハ何ともいうもぬへ
きしりなりなへしこめつなと云りしと云　裏書
押鏡云私云妙と云ハ數美元しけ手義不實可変云
今按数妙ハきし数とふりや妙ハ御詞也自分兼妙な
とふきもし歟

疊有青垣山　同集第一巻幸于吉野宮之時柿本人
麻呂作歌（上下略）よし野川たきつうりよききしのをたう
ヒきしてのりもしきりの國見をもしハきなりりをう紀沙
のやまりしの　仙覚云きなりりといかさりまりりと云し
山ハ似屏風なり云仙也屏風のこくよきなり紀沙

萬葉同集云青垣山ハ青山つゝみなれる河なれわ 青垣山ハ
雲ニ大和國吉野ノ山云々今按青垣山ハ有ニ大和國云一云但延喜式
第八巻出雲國造神賀詞出雲國乃青垣山ノ内ニ下津石根ニ宮
柱太敷立氐云々青垣山ハ志のれんいはくまた云ハきこしや
きこなれハたゞあをおりある也 清少納言枕草紙ニ子ハの
かしら髪のうらやましうなかくてゆるゝかなるほとなりさかし
けり飛まきうちおろしかけたる 又晋書ニ桓温平ニ蜀ヲ以ニ李
勢カ女ヲ為ニ妾ト着ニ齋中ニ妻南郡主与ニ数十婢ニ拔ニ白刃ヲ襲之
李正ニ梳ニ頭髪ヲ委ニ藉地ニ云々妻見けなよくかゝへつゝや
立名付 同集第六巻山部宿祢赤人作歌 八隅しゝ

我大君のきこしめす吉野宮ハたゞなびく青垣こ
もりて河次のきよき河内そ春へハ花咲をゝり 下略之
同集第十二巻悲別歌きゝなみく青垣山の隔りなは
しはしハ君にあはれなりかも 日本紀第七巻云 寂安
景行天皇十七年春三月陟ニ野中大石ニ憶ニ京都ヲ而歌之曰
上下略之 多々儺豆久阿烏伽枳夜摩許莽例屢夜摩
苔之于屢破試 下略之 釈云多々儺豆久ハ私記云青山並立
之貌也云々 多々ハ立也多与知五音通ス阿烏伽枳夜摩ハ
青垣山也 [illegible]挿てなかにいとしろうくしや 同
集第二巻柿本朝臣人麻呂献ニ泊瀬部皇女忍坂部

皇子歌（上下略之）かまわつくしわなしきあしいもの
ものあはれなるやはをとをたらすまよろへ
れいはりもむのようとあつ[illegible]云　同安云歌同
名附ハなりきすくしむも

新全文凝歌　同集才三卷長屋王馬駐寧樂山作歌
いそねのつくしこしねて稱ハなくとも
色ハ忘めやも　童蒙抄云石金とかけと物二也心
神中抄才十卷云顕照云いそねとハいとの根と云也
かとうなと云うつ　（中略之）あしひきのいそ稱こ
きしことをかけといそうの稱のあきらかなるこ

もしくとハ凝歌とかけといそねのきくをしけるも
こきたくとも同心也きとも同意也（中略之）いそねハ
そねハ同事也石金と云事ハ石と金とをつ
ふ人あるとハ偏事也　八雲御抄云石金とかけし
けき心也　仙覺云古歌ハいそねのあとをたくをとをあ
こうしを心ハ心の初なるうなるハ似て花とも未詳の
信例ハ人をハ人をハ稱ハ[illegible]ハ信
例ハゆうハ其心なるハとこ[illegible]ハ信
詞なとをいそねのつくしこしねとくくと云
ハとをうくふ（下異）

木綿を吹懸　同集第三巻石田王卒之時丹生作歌（下略）

作主を中形の小さき紙木綿しるきこゝになし

かもかけて　わが中あるさ百足の小地のなるまを　百合

集第十一巻戀歌　ちはやふる神の社の白木綿

きひとをもとゆるかもあらぬ　一書云木綿なを

きかくると云事　木綿を引きたれ男はこうてて

きすすきの穂なるを云　今按ずるに木綿をもて

白繒を懸ずして　日本記に頂人各着木綿手繒走

釜探湯云云

白妙之袖　同集第二巻悲傷死妻高橋虫麻呂作歌　白

細乃神さびたる人なれしきねし家思髮の長き乱

うなるもきいはやもて（下略）　同集中四巻丹比真人笠麻

呂下筑紫國時之歌　白妙の神ろ紀ろ（てかつらん

作とをかりへてゆきてこやしを　一書云白い衣の中

色し好よ白きへの衣白妙の神なと云　と按蒙

類錦綺繒布といふも皆麻苧葛屬を

作之也　紀に白たへの布色なわといふ

皇之御笠乃山　同集第八巻大伴宿禰家持歌　おが

きをのみきさしのもの　紫いそふの河白よりもの

すれなし　同集第三巻山部宿禰赤人登春日山

作事ありし　たるのもとかはとのの山乃さきうつのみ
かさのやまとよりなるとおもふ　んかれ御蓋山ハ又三
蓋山也後訓になしきたいハ也毛江ゆ三上山とも後
名新云江別世別記ニ三上郷　延喜式神名帳云
近江ゆ野別記御工神社名神大　おもはくこひ
なるもし　凡和語よりなるとかりてのり事ハ別の事
おかるべし

大永之比歌　同集才十一巻旋頭歌　海原乃うらゝ
ゆたとやわらこひをん大和のゆきかるんん人乃
見ゆへよ　同集才七巻譬喩寄草歌　ものおもふゆ

きたゆきようゆ蓆ハまゝ奥よりとおるきまを
古し集才十一巻　いて我をんなとりかう大永のゆき
のきゆたよ物ゆふころを　塗鈔云船よ入ゆを湯と
ゆふゆたゆ也毛を湯を波ゆ川ゆを湯と云ゆ
かくもを湯ゆを云ハ也ゆ大永のゆハ多ゆんを
ハ湯ゆくまたゆきしと云ゆ也と　童蒙抄云ゆきゆ
きゆきまとハうつきをゆふ心し　八雲御抄云たゆふ
ハ語多とかけゆ毛永なゆの動ゆゆくゆ也之　又ゆのたゆ
とハおけふこゝ波なわ又云うきゝうれきゆんし　奥
義抄云ゆゆきゆきとハ波ようきて云くゆくなわ

うきてとろく物とゆきふれば茅渟よい行豫と書て
たゆたひてゆくらとゆきもとをりしきをわぬ人をゆ
をいとゆくしと云ふ心くゆの字をいゆとしるしよみ
ゆくしく色染云下略ゆきふれ白雪といゆきゆ
大なる山なる迫し　袖中抄十四巻云とゆ白雪と
小ゆきとゆきもうきもうきもうきんを可相
第九十四
茅根恻隠　同集中十一巻寄物陳思歌　すがねのし
のをよ原のしをしてし我こいそのをそ人おもふ
と按茅根いちく入地なりと云歌　同集同巻おくふん
いそをと茅の根ふくもおもはゆるかを我の恋ひつるハ
同集中十二巻寄物陳思歌　海藻刈をすかの邪古茅根
恻隠て誰ゆへよりハ我のこひ乃ん右恻隠の二字或ハ忘
のひと訓し或ハかくると訓をかてしる也
仙覚云をけをすると云ハ男聲をとふと凡酒をさうと云
竹をきると云茅をすると云風をうとと云かことをきハられ
男聲をとふ也恋田中のなるい第也しすけと云ハすを
なわと云也
三津物語　同集中一巻雑歌麻呂人麻呂妻作歌　わ
きこいハ川ら少く一ぢんおもふ行ものこうゝ花の山とまふ

大ゆ[illegible]ん　日本紀才二巻云　豊浦田津姫依皇孫
不與共言皇孫憂之乃為歌之曰　憶企都茂[illegible]
[illegible]　釈云憶企津蕊瀛津蕊　仙覚云隠山伊埼山
也　中略　[illegible]
[illegible]　老僧の古修学者[illegible]
[illegible]　中よ算術書籍中[illegible]
[illegible]算畢とか[illegible]算よ形色をいつさなわ
乃玉重銀紬布或五穀等細布下行帳等[illegible]

書通貧粮畢りて已上何十何両[illegible]
[illegible]
天翔哉軽　同集才十一巻寄物陳思歌　天翔也軽の社の
[illegible]　日本記才
十三巻取要流軽大娘皇女於伊豫時太子歌之曰　阿摩儀
霧筒留悦等賣下果之　釈云阿摩儀霧私記云天尓飛
欲讀筒留ゝ発語也或説天飛也儀字登也音通筒留
悦等賣軽乙女也　今按天とぶや軽とつゝを云歟
仙覚云軽所名也島より云島あもしゝ法多ようゝ
てあまとぶやかるとつゝを又云かるゝ田舎

人いろかもなと云也　一書云ふの鷹（ハヤブサ）と　一説云ふ
八鴨の鷹しかもものと云同しこと凡輕社八雲御抄
云在大和国也

志毛正曲不葛城　古今集第二十巻大歌所御歌　志
もとふくすきの山より降雪はまなく消ぬ人ぞ恋しき
るの孔　色葉和難集云しもとこいはの枝もなきを
を埋まきしもて切て山ちもの也葛をもて作るの
なもいろうきをといろんとしもとはこの也と
詞林云總（ソウ）刑罰之左不限軍場依時宜設其刑既有
五芝所謂墨劓（イ則）剕宮大辟也其数分三千又答杖徒
流死之五刑凡可明律令正格式云此五刑之内答
ハしもとの科の軽重よりてたるもの数を分
杖中略之也　又ちもと小葛城と云諷詞也此答を結
葛といろもの也末葉と云葛城と云同ハ不好歟（下略之）
今按伴の歌古今集諸本しもとをいふとかけを組と
ゆと五音通すりやと拙ちもとハ又菱歌　頃後名所云
屋嶺（タケノミネ）云菱（青嶺和名之毛正）　木細枝しもとをいて知人一衣抄
なき木とひ答といつ名ありやはれる　凡葛城本考
高尾張邑（也）有土蜘蛛懸葛網捕取刑罰之時人改名為
葛城邑矣

青旗葛城　同集才四巻丹比真人笠麻呂下筑紫國時
作歌（上下略ス）　ゆのおきわ我ゆきもゆけはまもなくこのか
ゆゝ木山よきれしをきる白雲のしたし云　仙覺云青旗ト
去葬具ヨ作ルヨヤ常陸風土記ヨ信太の郡ト名
つくる所謂（エシ）をしるして云青旗乃葛木山ホトヽ
けさの木ゆりひこそもよろしなくこもりて此
きゝ八青旗ヨ似たれとも此ハ木ゆきをはてゝ
なりと見たること云ハたハなき義たハ是多のなくて
うわさ此ハこゝとハへり　一書云旗ヨたゝ（百）
のゆ抜ヨ旗のうつりきゆとハ　と抜き木柴

青色の蓋ヨヤ　同集才二巻近江天皇聖體不豫御
病急時大后奉獻御歌　青旗の木旗（カヅ）のちよかふとハ
目ヨハうれとも吉ヨおもふを　同集才十三巻挽
歌　おをはるのおゝ坂山ハたゝ土いてのすゝしき山
のいてきたれたゝきゆゝ（下略ス）是多を乃ちの記ス
但右才二巻の旗の木旗ヨ葬ハ　一書（百）ヨ葬禮の
旗の事ハ　と云ハ
腰紐ヨ須輕　同集才九巻詠上総末珠名娘ヲ歌（下略ス）
なりともおりよつきたる條ヨ作ヨ之のきゆのハもるハ
けのひろきわるをこゝ條ヨのすゝやと矢りヲ

ひとの　同集才十五巻竹取翁偶逢九箇神女贈迦伊
之罪作歌（上下略之）　わたつみのかみのすがたかさらしやまのかすみとなりにけるかも
みうせて　亀鏡抄云（宝山入道伊世作）　すみいさこ也（未考）八雲
抄云すみの麻の実石也けりともすると云
ともいへり　今按右二首ともに螺（スガル）嬴ともへ
きわ韓詩に細腰不自記といへるを同物歟　毛詩曰
蝃蝀有子螺蠃負　玉篇云螺嬴、工吉切、及細腰、蜂也
即蠮螉也凡螺嬴の訓或はすがる或はさなぶり
ほそとゝいつわさしたこゝ係ふりのもとゝ云ふ但右と

集才八巻離別歌　すゝなく萩の花原の吉らて読
り人をいかゝとゝはん　天木新正治二年百首歌大納
言隆季歌　面ゝくいたゝの野への萩うえて
なく虫のすゝなるなり　拾遺集ゝよかるこゝと
なし　ゝはさゝすゝ原ゝ　右三首と
ゝ麻ゝ　赤萬葉集才十巻夏相聞歌
春ゝ花いすゝかなりのくほとゝぎす　妹よおもほ
きゝ　袖中抄云頭脈云すゝ蛉と　能因蛉と
かきわ草のすゝ枯て　ゝくなりと云歌中累之
云何ゝ　すゝ　すゝかなりの歌と云萬葉の詞と異

抄よさうなとと私しきりいうとときこゆすらかなる
聖といたん申しいう と抄右顯昭之説にもときこ
ゆ但春去夏来て草はすのかきん申いく春者
きていを叩なるし聖と云ふ
葉根蔓しる 同集ナ四巻大伴宿禰家持贈童女歌
そねうつらいやすき味を聖てしてんのうらは忘
ぬるか 童女来報歌 そねうつらいまする味いな
聖といなる味ってそらひきるる 同集ナ七
巻雑歌河歌 そねうつらいまゆのいもうつる
みなとうとこきてしるとこ 一説云そねうつら

八葉根蔓也 袖中抄云是八女の女乃賜を敦忠の記
類聚集よ葛の篇よ入すると此竹文字も蔓とかも
といまする味とよ知ると葛てしまきるる和うる沢
仙覚云そねうつらい花の法花也花を言てかはうら
かは花なわなと称と同巻おなじなわ 色葉和難集
云さねうつらをいねうつらといへる因ひきの字也
されうつらと葛の字を髮よそへよ也 上按
髮八蘿髮乃菖浦漫なと云きひく 延喜式
第十五巻四座祭大神祭夏条料云忍冬花髮(ハナカツラ)
盛御笠一合 云云 文本抄俊頼朝臣歌 そねうつらはあり

ゑのすゑまでわさをきて花ちらぬ時をしるべしは
酒ヵ鬢と髮とをあらはすなり（頭係名鈔云
釈名云髮ハ髮の少き去所引被助反髮也俗用
鬢字非也

石綱　同集才六巻傷惜寧樂京荒墟作歌　いと
つなの海とものかいわ青丹吉奈良の宿をまさしえん
かも　小雪門抄云石綱ハ世の大綱也　袖中抄云顯
昭云いとなとハ何事ぞとしる事なし本
つゐ作法ねすもい石法化をつくるひ門きんを
いとなないわ和ハ係と同音也　萬葉云何

ものもを五百枝綱をふ百代まで
ほふ代いわつねハ苔むすまで
八云ハ又いとハ常絶のうつしつねハつねなる神と同音
也　仙覺云石綱とハ蔦也注をそえ
ゝよなゝ絶の枝をみをうん
よ多ゝ中略又わゝへ見ものとまとまとまと
そをうゝし下略酒ヵ同集才十二巻寄物陳思寄
谷せはを峯へよりつる石蔦のりてもあるかな年よ
こうもゝ云云なと同音しる可知也　同集才
十三巻相聞寄上界之いとんすんきんすんこ延津田

ゆゝしうもあらぬ　別（わかレ）あるまじき情（なさけ）のなきもよめ
るさまなどもうゝしくふるとしなるこゝろもきわの
ふるやいうにもまた絡石（つた）と尺へきわ

玉垂　同集第七巻詠月歌　きよ海さまの小簾（こす）のさま
しひとりてみるさまなるゆつくよさの　同
集同巻正述心緒歌　玉きしの小賛（こす）の垂簾（たれ）をゆたら
まいとはけとも君はいなゆす　同集第十一巻旋頭歌
玉きしの小簾（こす）のすきさま入こしひきはきしらはん
世のとはれた風ともうさし　風俗歌　きよ海さまのこゝ
ろを中ますゝてあるしいとやさうなるよさ

れもとめふこゆりきれ坂しりあけよ　奥
義抄云　玉たまい簾の美名　又同抄云玉しのこ
かゆるといはりそる物の玉代やまさうもそう能を云ゝ
一書云すとい小簾　ゆあ沢鈎簾也　小雲御抄云
玉きしいこゝろ也　又同御抄簾の美
名　或いゆるさ或こすとあわ能玉代のこす
ハかゆるゆる同歌　玉きしいは珠垂儀味の詞也こすハ小賛
也但玉垂いきしといとしと沢る発語歌こハ鈎と云く
清少納言枕草子よりみとりをかしあきもこ
きいやうたるもやこうよりとこれを

もて知り申し

歩麻年麻績　同集第一巻麻績王流於伊勢國伊良
虗島之時人哀傷作歌　うづ[illegible]
みあるなれやいなこ[illegible]
うづと云ハ物をもり詞乃酒一也とき[illegible]と云詞
也　一書云麻をひもを打と云也　し按麻をうつ[illegible]と
てハえうづしうづとハ歩ゐ海[illegible]を云ハ麻紡也
うびとハ績てなくなを云　同集第十二巻寄物陳
思歌　[illegible]
しまひうつ[illegible]　又同集第六巻幸于難波宮

時笠郡宇乎村作歌　績麻なす長門の浦なるよ[illegible]
[illegible]を[illegible]て丁知也うづ本綿うづ實なるこ[illegible]へ
[illegible]ハ[illegible]可見合
味酒三輪付三室　同集第七巻柳本神社人麻呂歌
[illegible]
[illegible]　同集第八巻長屋王歌　うづ
[illegible]の三輪乃[illegible]
[illegible]
仙覚云上下略　[illegible]
神酒をこハと云中略　土佐國風土記云中略　亦然云日
本紀第五巻云活日自舉神酒獻天皇於茲天皇歌

之曰宇麻作階淤和能々阿佐姫珥毛於辞寐羅箇
禰淤和能等能渡鳩焉　秋云宇麻作階耳美酒也
詞林又云うまさこのことばは歌詞の所に成
と云名あり　春日明神　譬しきの酒よ白こそう
ひて名れあるきい藤花の染よ似きの物也　御名
酒の宮とはいふなり　凡三輪之神者神名帳曰
大和国城上郡大物主神社名神大月次相嘗新嘗　古事記中巻云
此謂意富多々泥古所以知神子者上所云活玉依
毘賣其容姿端正於是神壮夫其形姿威儀於時無
比夜半之時倏忽到来故欲相感共婚供住之間
未経幾時真美人姙身余父母怪其姙身之事問其
女曰云云答曰有麗美壮夫云云是以其父母欲知其人
誨其女曰以赤土散床前以閉蘇四字以音紡麻貫針刺其
衣襟故如教而旦時見者所着針麻者自戸之鉤穴
控通而出唯遺麻者三勾耳余即知自鉤穴出之状而
従糸尋行者至美和山而留神社故知其神子故因
其麻之三鉤遺而名其地謂美和也云今按萬葉集
第五巻山上憶良好去来歌　反まとなる大王の酒
とよのうら乞又三輪神也云云
味酒乎神名火　同集第十三巻相聞長歌　うま酒

さうと神なびの山のもみぢはもちあそぶ天の川の上照之に
拔き出い耳美酒を醸とと法くせちらし　日本紀第一
卷よ乃使脚摩乳手摩乳醸八醞酒を云云同記第
五卷取要活日自尊神酒獻天皇欽回　この今き意
祝ひなさけ給ふ御ことなり御酒明望のわりこと
しみき伊句辱伊句辱伊同記第九卷云十三年春
二月命武内宿祢従吉野令角鹿筍飯大神一時武
内宿祢吉野宿禰之回許能弥金塢伊弥雞武比等破下略之
釈云許能彌金塢伊弥雞武比等破醸人
也上古作酒曰醸同記第十卷云国樔人以醴酒獻
手天皇欽云上下略之豫画国珥伊綿蘆枯明弥枳釈
云豫画国珥枳臼也伊綿蘆醸也枯明弥枳御酒也
こまゝを以て志ふ記し　一書云昔者此国の人酒を
造るとゝ口して米を口にかみて入れて
日を経て好熟しそれを醴と云ひるし好の人う
ふりく造まとも昔よ准へて吹と云へり大湯
国風土記に口醫の酒と云是也凡三輪三宝神南大小同
所也といへり
倭古力已之　同集第九卷詠水江浦島子歌　ひこしろよ
とし経さゆをはるまでかりつゝ遊ひけるや若

仙覺云古刀つらぬきと云ハとれ刀の鍔也ハ
きさらとゝ云ハ帝の宮ハ
つるゝ所歯ハとつゝきさらとゝ云ハ
鍛なとの事ハ
万目云ハふき古刀ハ鍔のさうゝとわる故よつゝきさ
らとゝ云ハ　と抑此詞已下の二字古点さうと
訓を仙覺説のごとくハ行ゝと可訓しかゝ云ハ
古樂府云何用古刀頭破鏡飛上天注云謂夫還
沼在月如破鏡時刀頭有環故云矣鐶ハ還と云ハ
乃何かつゝしとく李喬百詠ゝと云常鐶ノ
疑寫月引鏡似合泉ノ去注云刀頭有鐶似月刀有水
文義
伯劒和　同集第二卷高市皇子尊殯上殯宮之時柳本の
臣人麻呂作歌上下略之　ゝとゝもの國乃ききてゝ不彼山
おゝてゝ面つゝき和射見の原のゝ宮しゝすゝわ
ゝして　同集第十二卷寄物陳思歌　高麗劒已
之こゝを少へよゝゝ小のゝこゝみ付ゝや君と応ゝん
仙覺云高麗劒乃ゝきハ保こゝ紀ゝ今ゝあわて
わゝくゝしけなゝ　詞林一書云伯劒とハ柄をもくゝして輪ある
なゝ也

物くしに物をくしをさしてと訓を仙覺云説のこ
ゝくいはゝりと可訓しや
夜岐多知力　同集廿十八巻天平感宝元年五月八日
饗東大寺之古經地使僧平榮等千時大伴宿禰補
家持造酒僧歌　ほきそらゝとなる乃関よりあすは
いもりへやりつゝへ天をとゝ行なん　同集廿二十巻
原夫人氷上大刀自歌　あさしもはねのうらなきハ
御紀さらはしとこゝろもあれいはもしれ川を
一書云　やきそらいハ焼太刀とゝ祇
てとゝあるもれた祇とゝいきよりゝ　しに物太刀

奈美能波伊波（なみのはいは）　陸中ノ国名取郡　續
日本後記廿九巻ノ第和七年九月辛丑奉授越
中国射水郡従四位下高瀬ノ神射水郡二上ノ神
並従四位上云云但又御紀ニ云ふのことくいもり
祇と云ふや戸祭利とかけり迎多し
焼太刀乃陶村　同集廿四巻　振る都湯原王贈和歌
さゝなみとゝいハゝ　ふるさとのつゆふ中
いなりやわ君　仙覺云やきそらの つゆふとハ太刀
るなりきりと入きりなのあるとゝいなか
ゝはいのそして石さられあるとゝ云しされハは

年ハ八十ばかりなる白髮つゝ
ゐたりとゝいへいわゆるきさき
ひとつのつきさゝいたるとかゝ
さらのつゝみ付たる事古刀と
出語よりあるひとゝいへり又同集才九卷見蔓原處
女墓歌上下略之 手頸ハ 祢りの白檀ゆきとおひて
日本記才一卷云急握劒柄蹈堅庭 釈云先師中云案
風土記日向國宮崎郡高日村昔天降祢以御劒
柄置於此地因曰劒柄村後人改曰高日村也云神世
之昔以劒之柄稱多加比以之可知也

玉劒卷 同集才十二卷正述心綿歌 玉ほこ
をもわらはなれ乃なりけるをうまれのりよし
詞林云玉つるぎとよゝ乃なりハ浦のゝ言くとハ
鑓也玉を面なるさゝきやゝ 同集才十卷秋相
聞寄水田歌 劒柄玉鑓田井まハ川ゆてこの姉と
いらす家ゝひをんゝれを以て与和
劒古刀名 同集才四卷山口女王贈大伴宿祢家持歌
はるかをら名れ刀けるを我ハなすゝ君ハ
そをて年九ハ我ハ 同集才十一卷寄物陳思
歌 わきもこゝをひとつるぎ名

の行きくれて侍る程なるうち　一書云古刀ハな
ゐなきうかりけるなりけるなれ
劒古刀身　同集才四巻管女即贈大伴石補卿
歌　はるきたちかすみよりれなるふと夢てうれ何
のさうもたよりあるしをなり　一書劒てハ
身あるを鞘あるを刀身をいふなれ
但劒古刀ハ身乃まもりなる刀なるを刀身を元なるを
いふ也
玉梅間　同集才十二巻正述心続歌　むかしまなん
とゆきたなりのあへふ同さへ行ふ
同集同巻羇旅贈思歌　むつまを安信島山乃夕
べ　てハ孤れハこそなれこの夜を　安信島山
在大和云云井蛙　同集同巻悲別歌　玉川ま
清無しのタ　小ま　ちの君の山路こゆらん
島熊山八雲云播津也河信島山同所云云袖中抄
云むつまの山ハ出　顕昭云むつまハ
妻をかなくまうつまといつを東玉集云
たまつかのかハのかハをなきつて人きのうなる此雨首
中略　今二首の歌哲書とをかなくを

玉勝間安都島山の（上出）玉勝間島熊山の（上出）此二首の歌
共に島よりの事にかゝはりてきこゆるよりて又上か
けるも下句はさし行しをつらしといひて都なるの君
か心須こゆらんとといへる是は妻のもとをきこえたるひ
ゆられてしかりけれど初句にことけるなれはけれ
川となるしもとよ風にしよてかりつまとよめるの名
詞のおなじ歌にして此三首の歌ともへおもひ一つにいへき
（下畧之）仙覚云玉の川ゆと云は玉勝間は玉匣なるを　詞林
云玉うつまたいひしいふは（上出）続此歌に玉の川まとは女姓
いふとも言ふとも、いふ意のあしも玉勝間安都島

山乃（上出）此歌にて玉の川まとは云の蜆のおつなるへく
くとも云らいへは非（下）続美作国風土記日本武尊柳と
地を中りしより又おふ同書に勝間田池と云是は玉の川まと
は柳の古語也と見えたるを玉のつま島熊山乃（上出）此哥
は柳の叢乃しけきと川はなき也し由は六ッ地と云也又
玉の川まとは玉匣也されは玉の川まわりしと云も安
都島山といふをあふといふ言なり通はし　然者安集
の中に玉のつまの歌は此ある事は出雲に有けれ
同集廿八巻右家諸卿大夫宮人等宴饗於国府
城羅尓哥　株画わしきの川をけふことれいよふの川

まてよわらは社やら
ハのをれ美きハしけ志と云
事志ゝと云諷詞ゝ玉ゝ
人あふと法もさらし但神妙抄云つるゝ
といふんとすれ時又此詞あ
或人云玉勝間ゝ云と云古詞
ハたれを乃れて右の歌いつ
新中むゝけまおひしとふ
タゝ玉のとよゝうゝこゝ
恵き事元ゝあきゝ乃川ハ
仙覚云おしきとは

玉匣見　同集才二巻相聞内大臣藤原卿報贈鏡王女
歌　玉匣ゝしまゝ山乃さねかつゝ
あをゝてゝ
才七巻羇旅作歌　珠匣見阪戸山を
ゝしゝ
あをゝ
山保ゝ味酒三諸とよ
歌鏡能登香　同集才十一巻寄物陳思歌
ゝの山をゝ

仙覺云能登香山云云　一書云級陵とハ水也いつまも
しをふゆして綾ゝ仙きう水くゝ　ハ　ハ　ハ
音をなくのとうなれた能なる者のゆしつきもと寶
方物を大節の舞姫の級れ　ハ　ハ
ふとしよりる歌の反事　信女神言　うハ水面の
ひとへ級なるいとすりきよゆふとるを　清女神言出拾
草部　萢　萬葉集歌　冬ごもり　軒よりかゝるゆきの
こゝろもはなん春ゝふ　中暑之　又云鏡ハ日神
八神殿なるゆゑ綾ゝしのとうた　ふと
是をさうやと云ゆ　随ゝ云ゝ　ハ水面鏡とかゝ

少納言歌ハ水面を級よしたきゝ也

榜角　又榜食　同集才三卷大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去
作歌　榜角乃新羅國よりハこゝを　下略之　同集才十六卷
遣新羅使人等悲別贈答歌　ゝゝ　ハ　ハ　ハ　ハ
いかなる人の物をきふのあるかといふて　萩
日本紀云榜食新羅國私記曰弥說曰食也榜木色白故
喻而言之但稱榜食者欲遣新羅之發語也　仙覺云
くゝ白なる食也白とわきそたゝとは云なる
ゝ也れハ云ゝといまんを物ゝ諷詞よりきゝ
ゝ　ハ　ゝ　ハ　ハ　ハ　ハ　同集才

二十卷陳防人悲別之情歌上下略 大君のみことのまゝ
ゆ小さ江ゆ榜こぎ出なゝ
いかりもおろしあさなゝ
みてとゝ
集才九卷 ゆ江の江の
よほいて妹よ
ゆくゝ
京ゆくゝ

同集才十四卷相聞歌 ゆくゝ山と海
ゝ見山ゝの
ゝ
ゝ 右稍食といひ稍角といひ細鎖中といひ

ゝ川ゝ白といひ
云息長帯日女命欲平新羅國石坂比賣命教曰中略之
坂々良木八尋桙根底不附國越賣眉引國玉甲賀々
蒲國若瓦有宝白衾彩羅白絹
鳥網張坂手 同集才十三卷雜歌上下畧 ゝ
ゝ出て
ゝて
ゝて
ゝて 仙覺云坂手とは馬のかゝ不ゝ網を
ゝて
ゝて
秋柏潤久の柏 同集才十一卷寄物陳思歌 秋こゝ
ゝ川を

所し　同集同巻約柏のやかはの川辺の赤ちかの花
てはまは黄小丹へけと　百一書云柏同とハ河色乃
石のはまこうを云也　一書云柏の紫のやきそかとの
とハふし　し、按ハかハ　也ろ紅を寢ようへよ
ふ沢さしハ社といひ初とハ　ハ初とハ
長をふ久しの久ものよ　ろうのをしわしやとた
頃也ハのやハ河ハ　抄よ石所紅ハ
菌刺　同集廿一巻天皇乃天地遊猟蒲生野同線田王作
歌　あかねさ指しさ紅のゆきしめのゆきかるハ
をやを君の袖乃　同集廿二巻日並皇子尊殯宮
之時柳年約五人舎人歌　あかねさ沢日ハてるとも
ひとしのよりの月ハ西を打を　同集廿四
巻賀茂女王歌　大伴の河とハ心てを赤根指てをろ
月ハ出をるをあへわとも　同集廿六巻高市君
歌　いにしへとをうをををを沢おをけとやを
をあ沢赤根さ沢君ろこ乃しをををねつを
仙覚云略上下　おうねさすしろ紅とハ古語乃ようへ
とハを乃ろ乃しろ紅ハ根と月とをるをなを
を根わ紅物なをハおうをさす紫とハを石つを
奥義抄云略上下　おうねさ沢とハりをなとさなを

たゝ源也　万注八云赤根さすかとはたゝうるいゑのさふ
おうきよしわてはをといゑさん用也　と按右麻
呂歌のかいつもと日ゝ川つゝ源也おねさ沢いすて
おうゑ地をいうんとす毒綿すや或いはといひ月と
云或いは紫とひゑと云紫いおけとうん（ものおねさす
うゑといい丹心（ニヒヒヒロ）をつゑ赤心日本記者一きゝゑたるとと
訓すおうきゑと云同事也　同集才二十巻喩族歌
上下畧之　おうれひつきとつきてうゑ君ゑ
ぬ安加（アカキ）吉ゑをすゑらへすきいかつゝてゑうゑ
なとをよゑを

石上布留　同集才四巻大伴布留像見歌　石上（イソノカミ）ふるとも
雨ゝさいうゑ多や味よおりしとちきわし物を
万十巻同巻歌　石上振乃神杉かをひても吾やさう
く忘ゝあいよけゝ　仙覚云いうのうとと云いゑ
のうとといよよそふるなるという後語の何也ふるのかを
すきと云事いむしゝいそのうゑれ振川といふ川也女
乃布をわゝひけゝよゑゑをうとなゝゑ地ちの流まて
ゑわけゝとゑゑゑほこなわけわゝのかこ女のあゝい
けゝぬのようわてゝやわけゝとゑてゝそのかいを布留（ル）
川（ハ）といぬのようすまるかいとのうちよあゝ事ゑゑ地け

なるとかの條ことに門の條ことよきてをたまりたて
汗穢不淨のそのくそのあわを洗ひをれを罰し給
ひけるとその罪乃人しかねて是れこの乃しつさなわ
かくさてをたきたてて人をを罰し給ふてあれ
をもてうけて名わうの原のほこをうはきそ而よ
是おひ出しうを板をかのみすきとおもいのこをたた
くのかうこなをもうをひてもこをふこうみひてとい
かこさびてとゆふおるゆ也　奥義抄云淺社の世のこ
しまもの而なをもきくかうきゆきよをもいふしや
神中内云鎮服云石上かうとはくかうるゆい大和國よ石上と云

而よ布留の社と云郡坪淵是よりわていたれこをか
といはくかうくやうをこを而をいかうと云なを布留の心
布留のをうをなをしも苔女の何のをこよ布留を
淵ををををもをかよ河上をを劔乃なをきけるうよか
つ乃地を張破てきけるよ淵よりかをてをもをれわ
を劔をねて沙社よいをふよをわて布留とハ明のをこ
するとハうをなわをうけをるゆ但布留と云
ををいをうを神なをいかの社といをやよをつの神
の社ハをのをこをいなをけをてをを人布留の社
なをねををかうをと云劔よは石上と門をけをわ萬葉云

石上ノ神社考 也葉和難集 訓林説曰ニ
又布留の神杖ハ訓林云 上下略ス 此劔布ヲ中トシ此て
留ルとハ訓ケリ 俗人ハ神ヨリ下ルの
おもとよ神よりくだるとハ此ヲ一丈ヨリ出てうけ
ハ訓ケリ 一説ニ杖ヲ神格ト中ト云ク
今按石上ハ在大和國山邊郡也 神名帳云大和國山
邊郡石上坐布都御魂神社 名神大月次 又云磯城瑞
籬宮 御世詔大臣為班神物ノ定天社國社ノ之時遷ニ建布
都大神社於大倭國山邊石上邑 云号テ曰石上大神
又古事記中巻云建御雷神之横刀名ヲ云作ル布都
神亦名甕布都神亦名布都御魂此刀者坐石上神
宮也 云 云釈日本記第八巻云先師之説云石上社者庶島
神宮同躰也 云 云同記同巻云如此神器上古多納石上神
宮若今彼神宮歟 云 云日本記才一巻 上下略ス 其断地劔ハ
號曰地蔵正此今在石上也 注云石上乃布留社也 云 云ハ
上古ヨリ此此の神器ヲ皆彼社ニ納ルと云ヘリ
又石上ハいそのかみと可訓しや 日本紀第十六巻顯宗
歌於乃樂山時影媛作歌 伊須能箇源ヲ
云 云 とよ同意
集人乃薩摩 同集才三巻長田王歌 ゆやハ乃さつま

のことを平井なる沼ゝを云ふ歟ハ不分明

一書云ゝ人ハ武士のことを云ふ也　と、按日本

記才二巻云取要鹿葦津姫誓皇孫天津彦火瓊々杵尊

曰云即放火燒室始起烟末生出之紀号火闌降命是集

人等始祖也　火闌降此云褒能須素里　同巻云一云狗人請哀之

弟還出涸瓊則潮自息於是兄知弟有神德遂以

伏事其弟是以火酢芹命苗裔諸集人等至今

不離天皇宮墻之傍代吠狗而奉事者也云云

ハ集人ハ犬ハ人ハ訓ちゐハ也ハ也と見ゆ　續日本

記才九巻云天隼薩摩二郡集人当六百二十四人負

云云　按者右二郡より限て集人と云なるハ古よ

りの事歟集ハ須和名云第音訓ハ疾布作鷙鳥也大

名祝鳩　又詩采芑章云鴥彼飛隼其飛戾天薩

ハ薩人さ訓てゐるとやくいさけき人と云ふ歟

集人ハ薩とさいふひみてはるかやを尾くい

さ記人をいつる　ハ云集人ハいぬ人と云　拾芥抄汝

名所云薩摩郡云薩摩郡元ト唱夫

爾保杼里紙可豆思加　同集才十四巻相聞下紙國歌

まくらとして葛飾早稲をしハ

とうよきてゐやも　無名抄云かけしかなとふ

詞ハ稲つてあつとたまつの名也むかしとて来よなす
の名也 奥義抄云しれとれとはよねうつもと云ともね
ハあまうしと云へあまうし侍うつもまうけせこへ侍よ
ねハ五十首の字よそしかよりてよゆわかたうまハ田つく
る時中うひまうた人々をあ門めてし此神村の稲をそま
えをとして饗すうし其日ハ門をさしてさかりのいそこ
ねさまうよるひのまうなるもの此詞よなる人をいうう〔へ〕の
いまにねとも云来しうてんとふきそんやなとよめるなり
かなしつとハ示のたゝりや云 云 神中抄云顕昭云かつし
かの名とハ下総国小葛餝といふ示あつもまうれの名也と

云也 中略之 よわもうもとハしひとわもうと云しもしひハ新し
ほとひと同首なれハかよひてハ門か也是ハ下総の防
人か歌なりとて彼国の風俗風俗といひ俗語と云も
太抵ハ五首かよ人れし 仙覚云武抄云本説ていひし云かけ
しハかわをしと云ハかいしまやかなると云もとにしめをえ
するかへしやつと云ハ芝をうしと云祠なるもかまていまん
よそなとひしかといまんとてまつと云あれし心
なるとハかささきの秋とも云ならハかなしうハ下総
国葛餝郡し彼の国葛餝郡中よ太河あくふとわと云
河の東をハ葛東ノ郡といひ河ノ西をハ葛西ノ郡と云

なるものとの河志うとけくけるを中いかりしか
と云かりの祠うげくと云ひしかへいかりをひ物ん
雷矢の祝詞よりおもとをけるなもと保島いか
乃中ニ入くかりくがなしと抽こりくい潜し鳴の
字未詳但順傳名抄云郭璞方言注云鸕鷀 辞典二音
和名抄 逆保 壁島小而好没水中故本朝俗中ま
う紀をもて餐語とする元されい同集廿四老獻
天皇嬢歌ともあるとうけくびあとをわ
ホ保杼里乃於吉 同集廿二十老三月七日於河内出
伎人郷馬国人之家宴歌云 ふとをもてはきなり

かりをへぬこれをよるらじをつをうやを 仙覚
云かきなりかりを云いてんをの乃諷詞よりれ島のとは
けるし紀をうがをはいきなりと云詞よて同集ばいか
ちをいかの中ニ入て臭をうをもをかけきて出ひを
ハ息をなくけくへきうなしと按廟を島ようへ中を
長ようへよ多紀訳伝中山をもをとけるをを云
かを也しを息ハ未訓紀也或者集日本記息長足尊と
ア或ちをなりなくたきをて也なをよ多りし二原塩家
よりをうハ息也ようハ中ニ多家といハり凡沖中何とハ
大河の海ニ流入をるうを紀而を云とハ

国立公文書館
National Archives of Japan

花細　同集第十一巻正述心緒歌　花ゝ川あり　紀
こゝよりそめあしそめてゆくゆくはなけきの
日本記第十三巻天皇令衣通郎姫贈石見井傍
櫻花而歌之　田浮那貝波辞　作画羅紙梅湿之　萩
云浮那貝波辞花香也貝与和五音通　仙覚云云
しい保しの例　万葉目安云石細小石のうへ
きたれ　今按釈日本記の説のごとく小石のこゝ葉乃
花がそこにかゝるを紀とそこなわるゝと弦中苗集
名ゝ云き　長歌石細之狭峯なとゝよめる皆
ゝしい保しの詞歟

宇良貝波之　同集第十七巻四月二十四日敬和遊覧布
勢乃海歌　略之　うらゝかにこぎ出てみれば
海はあれども　云日
本記第十四巻六年春天皇遊于泊瀬小墓歌山卿
之体勢慨然奥感歌　略之　播磨紀制秋夜麻播河卿作
于羅虞波斯　阿野作于羅虞波斯　萩云播磨紀制秋
夜麻播泊瀬山也　阿野作綾也于羅虞波斯　虞也加
八字也　今按仙覚云説は信しる詞やと云
（以下略）

二並筑波　同集第九巻按税使大伴卿登筑波山時歌

こゝろゝてのひとりゝ山のゝ山をなとゝ
くほ里（ト脱ヵ）仙覺云（取要）筑波よハ
ゝ山の峯ハ男の神也と又云ハ乃方なりを小筑波
とも云也筑波山と云名ハ詞林云天照大神此山の巔に
榮し筑紫とひとも所ふよ水海の中に玉て麻婆の國乃
波雲ゝ所ゝて男の国とゝ山のゝ雲きよ著ゝ侍て
著波山と云ふ三ゝ雲を聖名ゝ名ゝよりて筑波山と云波乃
ゝ雲ゝ雲ゝ所とハ汲（みなと）上と云也　し、按小筑波の小名
ハ小海帳の小。小彩田の小乃ゝ二峯ハ二峯雙峯
とハいつゝ山とゝよ雲ゝ侍ゝ常陸

國風土記云筑波之縣古謂紀國美万貴天皇之世遣采
女臣友屬筑簟命於紀國造因筑簟命云欲（ノト）令（シ）
身名著國以代流傳即改本號更稱筑波者
風俗說云堪飯筑波之國
笠乃信手乃和　同集才十一卷寄物陳思歌　ゆきもこの
かさのうゝてのゝ和射見（ワサミ）ゝ雪ハ入ぬと味よはけて
奥義抄云ゆきうゝとハ雪の名ゝ　わと云字をこゝうん
ゝうし笠のうゝてとハいふ也ゝ乃紙をつくふ
ゆしてゝ笠乃はくのあふ雪ゝ乃ゝ
かとてゝゝゝと云ゝ笠といふ

仙覺云又或人云こゝ地ハ笠のかわてその口きゝのとよさ
ゑしをよゆふすけといふをすゝてワりきをハ
かりとつゝしますゝを拾うる蓑ふてはなしきる
蓑を口きゝのとゝしうまてと又は田蓑とゝふ蓑よ
てーそこのしうゝを口きゝうのと云蓑のわゝ
よろゝよりなりといつり

小餘綾　磯の發語也　風俗歌　おきゝのこゝの岩と中
ゝすゝおてあるいはゝとゝや出なるおなよゝうれゝと
岩よこゆきて波よりなるゝ月のけよ　大今集
第二十卷相模歌　こゝろきの波きゝなゝ磯
茱つゝ岩ゝゝゝすれ拾ゝを拾なゝ　八雲抄
抄云芝石不なゝとゝきく磯の總石よりみなゝへ已
或說云餘綾者當郡名也　俗作淘綾也　神名
帳云相模國餘綾郡川匂神社　今按萬葉集第十四
卷相聞歌　相模路は余綾のゝ伎のゝまのゝるこゝる
こゝろいかしくたゝるふかも　通而餘綾ハ相模
國の郡名也餘綾郡の中ゝ示伊藤と云ふ所ゝ
ゝゝゝゝゝゝや凡相模國者或說首日足輕明神さひ
あひの書ゝりまて記念の鏡を足を伊ひ
其書のゝゝいなゝてこゝ毎毎あゝけゝと

ぬばたまのくろかみとなりにけりと云又怪人おろしたるて
相模のゆと書事ありのこころとゝ
烏羽玉　同集才二卷相聞歌　いもしてあるとは
きんりたまの我がくろかみ髪しるれはかるゝと　同集
才三卷大宰大貳大伴旅人卷百代梅歌　ぬばたまのそ
の夜の梅とをりと詠て　おくて事はけるひし
物也　嘉撰式云未考　夢はぬばたまの夜はいもねぬ　ぬばたまの髪は
うたもの　能因歌枕云未考　うたもとはくろき物と云　奥
義抄云神とはしたもとはひとはとをもとゝ
又皆したもとよりわたくろかるものをしたもとゝ

ぬばたまくろきなとゝ　綺語抄云未考　したもとは烏瓜
の實と云　袖中抄云烏瓜の實金ぶくろき事なり　色葉
烏瓜の實とゝ　同抄　同卷云萬葉ようたもとは烏羽玉
烏とゝ　烏と云字とくろしとよめたくろきもの
ぬばたまの人烏の羽と云烏羽のみ　ぬばたまとて　清輝卷
よりとは人烏羽のくろき物なり　烏羽とよめる歌
又旋千ぬとゝ　紀野ぬと書　夜千ぬと云千ぬと書て
うたもとよりゝ　と按順和名云烏扇とは射干とも
かけとうすあときのこはまるくろき物なり

うたゝ玉と云を陸平は文字に此意かしひ平紀に野干玉
とかゝ紀又夜干玉とかく紀を異して干玉と時
野玉とかく紀又夜玉と書初　仙覺云　略
干玉と書てうたゝ玉とよゝ中ハ狐は百歳すきぬれ
妖艶のをとこに化すし百年を過ぬれ女に成妖女となる
かなしうたと可訓　略　中うたゝ玉といつる本顔に本顔
いろ乳未顔也未顔なをとゝ也ことりわゝとに相応る
いろをあらはさんとおもふ時は義此相應の未顔を
是用る也ぬれ玉といつるいぬい寝義ぬい敷ぬ寝面ハ
神の美わてちらたはしわ美を以て色に移し

ぬれ玉と云ぬれとい又夜を玉て本と丁玉とよ
とぬれ玉といつるなり也しし　今按順和名鈔云考色
切韻云狐音胡和名不豆祢獸名射干也關中ニ呼テ
為ニ射干語訛也孫愐切韻云狐能為妖怪至百歳為女也
然射干ト云モ野干ト云モ同狐名也玉ハ霊の訓よりの用きる
や狐は夜ふ北斗を指して化すとゝいハ夜の發語
とも云ふ歟黒色を須文ハ俗語なきを尺合也し
又詞林云烏乃相よりうさ玉あわてゆるちつせん
一天ニ雲くなわけりと云去物語の巻ト累ニ　掘射干花
のきしひよ蝶花ありとし、俗よしやうと云ハ語訛

秋のなかの色し　八雲御抄云布留説云葛葉よりしたもと
いつりくるもとをいつる葛葉よりあらはす　釈日本紀云
或説布留器石也言只欲讀黒之発語し
楯並泉河　同集第十七巻讃三秀原新郎反歌石馬寮
頭境部石補老麻呂　きてなめていつる川のみを
きよしとたのみ川原人天皇所　日本紀第五巻云崇神
天皇御宇武埴安彦謀反逆與那登那羅山而
軍之時　反軍屯聚而踊跳草木因以号其山曰那羅
山踊跳此云布　更避那羅山而進到輪韓河与武埴安
彦挟河屯之各相挑焉故時人改号其河曰挑河と
泉河訛也　し、梅泉河ハ乃しの木津河とハ又楯
並ハきえなかりてこも可訓しやハ日本紀第三巻攻磯城彦
之時御謠　咲々奈梅互いなきの乃山の云咲と互と因事
處女墓之神振山　同集第十巻相聞歌　未
通女紅の神ろ山の川うきのひさしきよりひな
ひなハ　八雲御抄云神ろ山ハ大和或寮名記吉野也一説
在対馬云　色葉和難集云乙女の神ろ山ハ巻向乃
元郡山とよめり　仙覚云神ろ山ハ大和の布留山
也神ろといふんとて神山ろとよめり　一書云此山
の在所不分明或先達云石上布留山と云也池ろ

出集第十二巻歌云　ひさかたの
石上神ふる川のきよけきを
今掬水の月今云五節傳云天皇所制也
傳云天皇吉野宮御座時日蔭蘰
髻鬘而應曲舞袖反變故謂之五節
まうてゝ女子この神ありとい云とい
野なる〳〵手〳〵分節元凡五節舞天武天皇御宇白
鳳六年始云
儀鳳島大和　同集第十三巻相聞歌
の國より人ものあるとしなくなるのなるとう

今掬島云者後漢書東夷傳曰倭在韓東南大海
中依山島為居　魏志曰倭國在帯方東南大海
中依山島居　大和云者弘仁私記序曰天地剖
判泥濕未乾是以栖山往来因多蹤跡故曰耶麻
戸又古語謂居住為止住於山也　延喜開題記
曰師說大倭國草昧之始未有居舍人民唯據山
而居仍曰山戸是留於山之意也　又大和國日
本書東唐書曰日本國者倭國之別種也以其國
在日邊為名或云倭國自惡其名不雅改為日本
云云又以大和我國總名　釋日本記云問本國之

号何猶取大和國為國号耶説云磐余彦天皇定
天下至大和國王業始成仍以成王業之地為國
号之 下畧 同記第五巻云先師相傳云此今大倭國
陰陽二神叙初依生此國以我國之總名号之
又和別日本國稱同記同巻云先師記云總而謂
之者日本國之号也別而謂之者大和國也且當
紀一書文大己貴幸魂奇魂欲住日本國之三諸
山之以大和國稱日本國是也　仙覺云式島大
和と云ハ記きぬ乃号也とそれてこいつるかとも
此哥在万葉詞林十一十二両巻　一書云式島大和ハきりかねきり詞なる

所詮秋城宮ハ高市郡也島ハ伊漢書魏志云へ
ふることゝ大倭とハ弘仁記序延喜開題及釈日本記
等ニハ倭ことゝ凡和別ハきしのゝ改名あり　續
日本記云養老四年十一月乙亥堅下更號大懸郡天平
九年十二月改大倭為大養德國同十九年三月依問ね
大倭國天平勝宝年月日改為大和國
島総立附一説　同集才三巻造筑紫觀世音寺別當沙弥滿誓歌
ふさきてのゝ山ゝ松不きもの材まきもよせけ
ふなきと　同集才十七巻能登臣從香島津発船行於然
来村往時歌　ふさなりしゝ乎不きもといふのゝしまふ

ふれいこうちたりしてゐ代神ひう　奥義抄云ふさ
とい草木のすえ也　良材集云木乃末なり　仙覚云
ふさと云ふとい此集兩所ともに穂を先達也を穂すな
ふさといい草木のすゑなるとゝいへり此歌ともいふるいあ
ふ　中略　ふさとはすさかをなりてふさきてあし
かる山のとはきをそる雨きとひうの謂なりとかや
よほひかんとをうしかる野辺をはあるとうをはよりをてこ
きいすきうをあなとへしの物をもて木を切るをけて
ちる花をい松人ともいはしと云ふ然いふさきてあ
かる山と同いきをうしをて弁の心い弁木ときうはをへ

てかさうの木よきりかをしとすりかういなを
すききりかきりきいいよりきいなきとを弁よきね
也弁い物よさうをいをといし野花なるつしれいあよきり
よりあきうしるををよりをを　八雲抄云ふさい為
結とかけを　中略之　木の梢なるを松よへくをとうをいるう
すをのをを切をうをうの跡ををくきををうり
也仍をよきりかいりといよりをるしあるをいは松よすを木し
仲は紡出　上　滿誓う筑紫観音寺造所の歌しわ　略
山い未茂之松人をふさきをとい寺川きををふを
いつの同半　詞林　一書云ふさきをてあ　略　去　上　し雅　此

歌之心ちときこゆ 所本亞足とて切れ川のちなみ島の廻の景ふ
仰やうをふさとひ本亞足ひかゆくちりをを拾とよ花をを
まや 又島の廻ハ歟ヲ総のごとくしく島とんとてハ川
廻をきくくをかくふと云まやと云 一説ふさとハ
落花を云 凡兄桂ハ当日は處ヶ和白然と云土蜘蛛あり
きハ先てをうあり当日本尊当下向国神之故あり
かゝ山となれくとふ 亦云は山ものをまくつしよ其舟きハ
先てをうかりをれハやて山のををしけをあらう
小船と云是也通云 八雲御抄云あり小船ハ
かゝし海の舟し 今拾万葉才十四巻相聞歌も

つ一説あり云をはありきをを先ハ亦かゝりかこゝろ
ハをゝと右相模小歌とあり以ゝ可知之
水沙児歌 同集才三巻山辺宿禰赤人歌 美沙歌ハそハ
よまなのをとうれ名ハつきしこよ巻ハしかとも
同集才十一巻旋喩思歌 みさこかゝ清よ船ハ舟ハ
伝をとかりらんまわを我をををきさか 同集才十二巻寄物
陳思歌 三作吳集あ歌ハ歌ハ巻なををのをな
ハををしやハをとを ハ雲御抄云みさこかゝハ海や
みさこ井ゝあゝ歌とふハ海ハ海ハ海ハ海 仙覚
云ををこゝかりとハ氏島ハ空をを仙覚指をもかを

水中の奥乃ありと云てあるよりつく奥をとり島
詞林云上畧之 今きこゆは島よりあるうち波のうちよせ
きり例也中畧之 今按備后の国もとまりとて訓しや
頼和名抄云説文云艨子紅反俗云高流 船着砂不行也随京極黄
門の作りたる物なり今きこゆる島よりあるとたゝ
也ハ私の思掛しも奇なるしや

玉藻吉讃岐 同集才二巻讃岐狭岑島視石中死人柿本
人麻呂作歌 あもよりをさめきてはかりみまとをゆ
ねこかりつゝいはれあめつちの 一説云讃岐国
號去著也天照大神更衣所也脱換衣裳更著清服
所也然者玉藻吉ハいふまや但小藻とハ同集才六巻
玉藻刈幸行の島とすと吉とハ同集才十二巻よ玉藻
吉宗我の河原なとよ刈りそ
村肝乃心 同集才一巻幸讃岐國安益郡之時軍王見山作
歌 上下略之 しらきゆ乃ゆとりくるめんこゝろ云 云同集才二巻
相聞大伴宿禰家持贈坂上郎女歌 村肝のこゝろをしてい
ふあるかこゝらくを云すりわん 仙覚云村肝去志餘
乾一向思歎其肝凝胸間也 詞林云むら肝といつくゆ
はるゆ因ハ肝すゝまきあるなり然ハ新勝手とゆ
こゝろや

一 天尓満倭　同集第一巻過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作
歌　上下略之　そらにみつやまとをおきて青丹吉なら山越
こえ云々　同集第五巻好去好来歌　神代よりいひつ
け来らく虚見通やまとのくにはすめかみのいつくしき国
之　下略　釈日本紀云及至饒速日命異本作櫛玉饒速日命
乗天磐船而翔行太虚也睨是郷而降之故因目
之曰虚空見日本國矣虚空者与虚空見訓讀通之無別
義歟
一 栲縄　同集第四巻亜郭麻蘘娘子歌　たくなはのなかき
命をほしけくハたえすて人をみまく欲りこそ

八雲御抄云たくなはハ海人のなわ也　仙覚云たくなはとハ
あくなはと云也あとたと韻相通なれは　一書云たくなはん
とハ焼縄也汐にたく縄を海士のひろひもてたくと　廻而
後鳥羽院御製　難波江や蜑のたくなはたき侘て焼
くるしきなり五月雨のころ　古今集第十八巻隠岐の国に
なかされて侍ける時によめる小野篁朝臣　おもひきや
ひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせん
とは　奥義抄云あまの縄たきとハなはをたくと云心にはあらす
中にてはくるといふをたくと云にはあらすたくなはと云この心に
一 機　同集第七巻羈旅歌云　乙女らかおる機のへをまくし

しるして叩け傳島波やすらと云日本記才二巻云高皇
産靈尊教大己貴神曰中略中以千尋栲縄結為百八
十紐矣是二神乃從其言而自隱焉
五月蠅奈国　同集才五巻山上憶良老身重病經年辛
苦及思兒等歌　略　月しらねうまれしとき母しらぬ
ちちとはゝとさりへなすさいくこころもとうけてい志
なむいしはすられあもいは云奥義抄云さりへとは
いさ記りへすや　日本記第二巻云　略　遂欲立皇孫天
津彦々火瓊々杵尊以為葦原中國之主然彼地
多有螢火光神及蠅聲邪神　釈云案下一書文
如五月蠅而沸騰云云　五月蠅三字之訓さりへと讀へし此
蠅聲同類也言葦原中國惡神充滿如五月之蠅象多之
意也　然いさりへは五月之蠅也奈国は花もしとふはなし
水沫奈須　同集才五巻右思兒反歌　なはなすとろ或
命しきくないのちひろはかれもしろし川　今稲
荒れいたるの泡く水泡いたうかき法のうへのうれ一也　金
剛般若經偈一切有為法如夢幻泡影如露亦如電應作
如是觀
奥津島　同集才十六巻筑前志賀白水郎歌　奥津
島鴨といふ舟のゝへりこいやすの崎曲はゝ漕く川也こゝろ

日本記第二巻云 取要 豊玉姫涉海経去于時義犬
々出見尊乃舉釵曰飲企都劉利軻茂豆句志麻
尔和我謂祢志伊茂播和素邏珥譽能據劉馭劉
毋 釵日本記云飲企都劉利瀛津島也 或欲讀
鴨之発語軻茂豆句志麻尔鴨着島也 奥義抄
説大略同之但引古鴨住島とは舩住く島とよ
ませし 八雲御抄云かもと云舟と云ハ舩の鴨と仮也
玉蜻 同集第二巻柿本朝臣人麻呂妻死之時泣血哀慟作
歌 大きねのおほきみの玉藻の磐垣淵のかな
れのも 同集第六巻悲寧樂故郷歌 百よろ
ちとをとこ祢てさきもりけむ東城のみなこハ宝叔春よ
しもなきいもを山云云 同集第十巻春雜歌 更よ雪ふ
花ちやもかけるふの山ゆ春紅となりにしものを
同集同巻 ゆきとけよ春ハきにけり人の少
なきけよ春きにけり 同集第十一巻寄物陳思歌
かけるふのいとなきものゆゑにはゆてゆ
ぬるなる
花いとも 同集第十二巻寄物陳思歌 あさこうそ祢
ぬるかぬるを佐ふの佐のうらなみ乃えていふこゆ
八雲御抄云 しこ文よ雪ふりやまし出 こうそ祢ひとゆ
といふ出ふ佐ふ佐ふ佐ふ佐ふ佐ふ佐ふ佐ふ佐ふ

故人説也　袖中抄云かきろふの春とは、けそろい萬葉
よりはきろふのもゆるけしきとよめる春のうすぎの
ゆきうきをろふと云出はべるへいもとゝ詞を略して
かきをろふの雪といはくろ也　一書云きろふの雪
といふ草の名也　百一書云こけろふの藤原関といけろふ
いろろき物なり物よ見えもろきをよ用てかけろふのいと
とはるく　又云こけろふい蜉蝣也　童蒙抄云ろろ或
字偏りて小キ虫也　仙覚云ヒさろよ出かけろふ
といふ春よ成ぬまこれ日乃うえ行こうよてをるよおの
くもりやすきもの也いとはかなしなと云も此物

とも也下略　今按石かけろふの春ありなをいとよみけ
ろふの雪もゆるけしきとよめるいふ陽炎こうろふの石垣関と
よみこうをろふのかのこうよ乃えてとよるいふ蜻蛉又蜉
蝣と云て有據考之毛詩云蜉蝣之羽楚々注云蜉蝣渠
暑也物生多死云云又かけろふの夕とよめるいをくかける
と云ゝ

蜻蛉香具　同集第五巻世間難住歌上下略之　うしのひ
かんろき髮よい川のまたに宜乃ひろんを云同集才
七旋頭歌　おりまの日賣茂原ひまなれろ孫名れ
のひろ香具髮よあくしはくれ　今按蜻蛉順俗名

飲河貝子　崔禹錫食経云河貝子和名美奈佐用楚字非也音孝連蟹
出展良也　敷上黒小狭長似人身者也云々
記也とハ見ゆる所腸はらわきものゝ末考えハ
きしの文字ハ助語なきとへい香青弱なといふことし
麻欲蜉吉　同集第十四巻相聞歌　妹をこふあひた
こゝろのやましきにしるやまへらの志ゝなすなすへふ　百一書
云麻欲蜉吉乃稀山とハ今の横さ面なるとはゝらふ詞也
今按ましひきい眉引也　同集第六巻大伴宿禰家持和月
歌　ゆつさもてしこの月見ていにしへ人の眉引なぞ
ゆかしき見初しの月をもて眉引まをふやましひきの横

山も玉京祀より早文尼眉不加黛見如遠山なといふ
きもひなる色　日本紀第八巻云美女之眼
釋云私記曰索楚辞城眉曼眼王逸曰視貌
志良登保布　同集第十四巻相聞上野國歌
しなとの海ゆ出る山の三角なすとこ
ろもてこそ　仙覚云ふとい新しきをいふ
ますらを初　神代紀云ましひきいとなる山の新しきをいふ
きもいハ小新田と云也　泊瀬山とハ小川せゝと云かゝし
然とこるまつまて思ふ紀
八雲御抄云ましひきの山吳服をもとる山同事　今

拾石秋既より上野国秋ヒあるを松平川かなき事

玉葉　同集才二巻天皇崩御之時侍女后御作歌

人はいさおもひやるらむ　ふる郷の月は昔の光にて

秋はなれども　同集才十二巻寄物陳思歌　むらさきの

ねはふかすとも　何ゝも妹よあふ所もなし　仙覺

云むらさきとは冠の纓をいふ也　一書云むらさきの

の野の物

鶏鳴東方　同集才十二巻悲別歌　いにしへよ我

おもふ人はなくあつまの坂をこゆらん

同集才二十巻追痛防人悲別之心短歌兵部少輔石上

家持　うちなびくあつまの坂にかなくとり

きみ　こゆらんかなし　袖中抄云云中記云東南有桃都

山上有大樹名曰桃都枝相去三千里上有天鶏

日初出照此樹鶏即鳴天下鶏皆随之鳴　今案

東南天鶏初なくは天下の鳥皆なくと云ふ事也

ものなくあつまの坂と云ふ日本記云日神岩戸幽居

之時思兼神聚常世之長鳴鳥使長鳴云々

鶏なきそ日神おかしと思ひ給ふ事の中よも

かなしく思ふ　晩ものを思ひ給ふ八日本書なを八日本

東よりなくるものとハ

ものなくあつまの坂

昭島のあつまりと云ふ説もあれども　仙覺
云（略）ことのなくとたかの事いはれまと云おの宮よ
わくと云んあまとも名いはあらたをたてなく物語も
名このなくあれまといへはもきこえをのおの
ハ東ちとしを程をもしこの物をしたゆきを情の物を
伊勢一曉よい島のなく名ちまなわ思ハ
ゆめとも時とをわをとなくをきて塩をなく
なしひるをハちりまと云詞をきて島のなくちる
とをへはくけるし　凡東國を吾書に名つる事は
神中物云顯昭云（上略）日本紀才七云日本武尊相摸ゆ

とを工総國より往ましとすし海中よりして暴風急
起て王船漂蕩して流へ方知かつる如あれ
才（オト）橘姫と云　種稜（ホツミ）氏思て后称の如也王て孤して
云風起浪泌（ジヤウ）して王船没す是必海祇（ワタツミ）のんなを称
おくいい風きせうの事をいはまて命をわして海よ
りしとをいひをいてほ浪をかうをて入風をはら
風んて無者よつを事を云ふこをを物よ時の人を海を号
して死者といふ工総ゆをを流の國より矢ちり入姫天既
をけは日言尺のおをを選て（中略）面のをうをを坂をた
をへを河より日本武尊毎よ事橘姫をしのひ給ふ

心ある様ようすしめ給ふて東西の事をて三路して曰吾嬬去耶（ワガツマヤ）所の事を問給ふ吾嬬去耶と云　釈日本記説同之

八雲刺（ヤクモサス）　同集第三巻溺死出雲娘子葬吉野時柿本朝臣人麻呂作歌　八雲立つ出雲八重垣つまごめに八重垣作る其八重垣を

須佐之男命の歌の詞　日本紀第一巻上下略云行覆將婚之處

於遂到出雲之清地（清地此云素鵝）乃言曰吾心清々之（此今呼此地曰清）

於彼處建宮　或云時武素戔嗚尊歌之曰　夜

句茂多菟伊都毛夜覆餓岐菟磨語昧爾夜覆餓

枳菟俱盧贈迺夜覆餓岐廻　又同記同巻云一

書云草薙劒本名天叢雲劒蓋大蛇所居之上常

有雲氣故以名焉云云　石鏃之川上大蛇所居之上

ゆ八色の雲立ちわたる　出雲国風土記

いにしへ古今集序云人の心を種となして素戔嗚尊

よりみそもじあまりひとつの

八隅知之　同集第一巻天皇遊猟田野之時中皇命使間人

連老獻歌　やすみしし我ご大君の狩ばきこれの野に

さ寝たる我ぞ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ

中略　釈日本記曰　言治四海八埏也　或説

昔御同城天皇遊猶於那良山時有麻呂再度跪拜
天皇悲憐彼鹿遂不射殺故欲言我君之時有此
發語是息麻也　續日本紀云天平十四年皇太
子親傅五節右大臣橘諸兄奉詔略因御製歌曰
やすらけくわがおほきみのいでますとみ
きかりつる　仙覺云略面白云
歌言詞次のしは詞の助也言
ものの國主大八島の國と白
ものを詞也凡島とすとふ音の同内相通
とみとい又同内相通也故一面とひすと云ハ唯同高也云
佐豆人之弓月　同集才十卷春雜歌　かきつのの多さとなた

さ河人のゆきゝのきよすたるひゝ　神中抄云頭脚
云さ河人とハ薩人ことゝのゆきけきかけと武也
薩雄と云も同事也さ河ゝ武ゝと云也中略之薩人
ゆきゝのきよとは薩人のゆきゝとはゆきゝ也中略之槻と月と同
訓なれハゆゝ月とも、かきも也中略之或南都の人ハ中仏ハ
ゆゝきかけとハ言ハ雄略天皇乃ゝをつきまるひを
ゆゝしゝと云也ゝ仏ゝをつきまるゝやゝ
杖也　童蒙抄云さ河ゝとは五月ようとする人とゝ
ひなをゝ　ゝきゝいひの事也さ河ゝとは云詞
也ゝとゝわと同意也　神中抄云さ河ゝとさ河ゝを

しかのごとハ下略也五音同よ音をよれこと百所ハ常
ものと下略し播磨額ヲ槻木若堪能也三ハ江
槻と云ものハ又薩人の所為なるハ薩人の弓槻也
ハけくらなり和し　凡弓槻当来八雪降ハ云大和也
也　修理亮実頼卿　関白ハ
つさきハ高しかたらハなとをよ
鳥翔家　同集第二巻山上臣憶良見結松哀咽和歌
ものなるものあるかしひけく今らかとも人こそしれ
仏ちらん　一書曰鳥翔成といふの相ハ成ても
あくかしとこんも　今播磨ものあるかしハ往来する也日本

記云鳥往来羽田之海妹者下略釈日本記云私記
曰鳥往来欲謂羽田之發船也ら此をもて知也
妹衣乃狭壹左謂又阿利伎奴乃伝恵々　同集第四巻柳本朝臣人麿
歌　妹衣のさゑくしけをもて姉ハいとをきて
ものつを　同集第十四巻相聞人麻呂歌　あをきぬの人
くしけを家乃姉ものあいをもきてをもひ
神中物頭脇云中略きぬハ俗しる詞ものさゑくハ
也きぬのあをしきハくとなる也　しつしハ
しけるものをもと云也下略　一書云阿利伎奴ハあを
ものの絹也地ものをくもをさゑくも也弁と等通

仙覚云〈上略〉さゐしくとゐつとはさゐれゐとは井手ゐと云つき
こゝしはひろもいふまなりきぬなきともしくいまハ三川
ゆかれハいなかも事なるて静まなりきいふもいうせかゆ
そのいろまきてゐなしきゐとよ歌也

月草　同集第四巻大伴坂上家之大娘報贈大伴宿祢家
持歌　つき草のうつろひやすく思へかも我思ふ人
のこともつけこぬ　同集第十巻相聞寄花歌　朝露に
咲すさひたる鴨頭草(ツキクサ)の日たくるなへにけぬへくおもほゆ
同集同巻　あしたさき夕ハきゆる鴨頭草のけぬへきこひ
も我ハするかも　八雲御抄云思草とは露草也〈ト通〉

具卿説也　仙覚云月草とは露草をいふ也ハの義
ハ明日歌にもあるあてこれさく月花ハ月歌まあるわ
てさけハほまきとなと云といへり　詞林云〈要取〉月草俗云
露草翼酢花(ハナスヽ)〈説〉付(ツ)一(キ)鴨(クサ)頭草　韓藍花(カラアヰ)　唐棣花(ハネス)　鶏(ケイ)
冠草(クワン)　百夜草　みなかはしきもの也　一書云鴨跖
草〈和名同上〉花ノ名ニ淡竹花〈ト和名阿〉〈一千波奈〉今按同集第十一巻鶏冠
草歌ノ注云類聚古集云鴨頭草又作鶏冠草云依
此義者可和ス月草ト然者鴨頭草鶏冠草まかれ
ハつきくさと訓する事勿論歟順倭名鈔云鴨頭草
楊氏漢語鈔云鴨頭草〈都岐久佐〉辭色泣成云〈押赤草〉

鶏鳴布流　同集第四巻相聞大伴宿禰家持贈紀女郎
歌　うつゝなくものをおもふに里とをみ　何ぞも妹に
しらしなき　同集第八巻沙彌尼等歌　手弱女なれ
ども　ますらをの心を持ちて　ものの林を伐るとふ人
あり　同集
第十七巻天平十六年四月五日掾石竹朝臣水主
大伴宿禰家持　うつゝなくものをおもふと人に
はをれる　花橘の　このやど　一書云鶏鳴　なる
あきさかりの里なりとよ　鶏の　こえは　ものを
きこゆ　云しとき　同音なる　はなきとも　よりて
三枝　同集第五巻憶男女名古日歌　上下略　うつゝなきかとも
ものをおもふ　云　同集
第十巻春相聞歌　春されば　まづ　さきくさの
はのうへに　あはれ　なこひそ　ひろはまし　を
春の草　花　をんなのとさ　紀草と云　一書云　紀ふさい
あふきと云草　すゝ　ものけ　いを　ひて　よりて
藤原孝公云　紀　ハ　説未也　八雲御抄云　家を一説　紀
ふさとは　是未知　中略　也　推　家　紀　三　八　同
さ紀ふさい三枝也　神の名とも　はは　桂　とも　云　一説
安乃名　紀　地の神の名と云　延喜式云　三枝祭二座
平川社云　拾芥抄云　三枝　平川ノ社ノ南ニ有社三枝

御子也以三枝ノ華ヲ餝ニ酒樽ニ祭ル故ニ曰三枝祭ト　清少納言
枕草紙云ひの木人ちかゝらぬものなれと三つはよつはの
とのつくりもをかし　仙覚云上略或ハ葛の中より
さかつ庭と云草をさしくさと云とも云へり 中略 三枝之中
尓千年この歌はなは草は生出て二葉なりてちくさくま
まとへつ三葉の中よりはしめとはすにさきさへける也
万葉ニ人云父母の中よ子ねるりは三つありえさし草此中
と云し　古今集無底抄云さし草とは桧木の名也さいくさひ菜
といふを略して何きくさとは云也さいくさひとはさらといふさ
きはさら草といへる讀なきよりきひら(?)なきはかなりし

てさし草とは云なり也し然てきし御所内裏なとさえ
かなしき桧をもてつくるはさいくさひのつきなりけるおもしさ
いくさひ草とは云之三葉四葉とは七の葉なるを七乃葉とは云
七葉まはあり深山傳くの枝也　一書云三つえよつえは三棟
三棟四棟と云なる也　一説云三つえよつえは三間四間也
えとしまと同音也　藤玉ニ云　杉むらや名をも三つま
しけき三葉草家つくるりすりゆけさし此是也歟
はしへもとみきなるとふ古歌のここへたなるとも同藤玉云
この内は四方も八隅もよきなるとは四間草なれとけれ
咲けるも是は川ましを桧なるともといへるも　色葉和難集

云座にハさくといふ字ありなるとなと云字もやつき
えなといふあひつ此によせて作つけねさきこゝろによ
多りけりや　ゝ揃さ紀原とハ二葉の草の名也　順倭名抄に
文字集略云葛　音娘　和名佐木久佐　日本紀私記云福草　草ノ枝々相值ヲ葉々相當ル
也云　云然ハ福草と云ハ草にかさなる故但さ木枝也とい
へりと推之草にさまと有にさまと枝々相值葉々相當ルとハ
すへてさ紀草と云によりて福草ハ延喜式云瑞草也
朱草ノ別名也　生ニ宗廟ノ中ニ云
垂酒乎押垂小野　同集第十六巻歌　下酒をた
しまゐ小野ゆ出る水ぬるくハあれと汲ひやあれ　下略　但

垂ゝ酒ハ醴といふ是ニてきと同音也押垂とハ酒を醸といふ
よや　一書云琴と酒と芸になりてと云こゝろなる押垂
小野未考也
隠沼　同集第十一巻寄物陳思歌　かくれぬのしたゆ
こふれハすへをなみ妹か名つけつゆゆしきものを　同集
第十七巻ゝこもりぬのしたゆこひあまりしらなみのいち
しろくいてぬ人のしりぬへく　八雲御抄云つゝみなとのやう
なるにぬのをいふハかくれぬといふハかくれたる沼なり
こ　今按隠沼ハ割なやまはぬ間と云ノ　同集第十
一巻問答歌　かきつくさきさく沼の菅を笠にぬひ

よみ人しらずとして初句
白檀斐古　同集才十二卷雜物部思歌　白妙の
乃細江の茂り妻乃姉よふまやつどわれねつる　百
書云中臣とは川と川いらつめ　八雲御抄に斐古紐法
花鬘抄同剖　白檀八白太子
也或說云作り木有品々檀樺槻なとこの中に
檀為工品故檀ノ剖　太子ト云百七歳　磐崎歌云　乳
ちの細川山より出る檀ゆつきまて人よ言する
大和能思憑　同集才十三卷相聞歌　ゆく舟のはやひを
のせ乃ちに出ゆくよつら出る　百

目云大舟ハ風波をもいとやぬし　仙覺云大船ハ
うちとけの中きものなきハ行かふねのはやひを
のことをよるなり
葦垣之間通　同集才廿平原乃工丁刑部直千國
歌　あしうきの久麻のをきてをきてつきこの神を
ニわ乃ちなしとうもいゆ　古今集才十一卷戀歌
人しまぬとひやうとあしうきのけをこ
まうもあふしなし　毛葉和雜集云祐云成物
云　あしうきいつまきものなをハと垣ものを
かくたつまいはちしとと仰をとをいく寄

あり 俗にとうきうと也 位ちとうへと葦垣之編
俗の中よりしを打ちまてゝ
いへつとりとりの中 一書云あり 紀の麻と川ゝ
ありのゝとを見 し指打ちのうゝ 海の〳〵をてあり
ついあらあり いすいうしゆとあり 然をあしうれいすき
也をてゝ百をりとも なれをあり 百 はまちうとはよまち
ゝ

き角髪依綱 同集第七巻旋頭歌 あをうれ 百 ゝ
ゝ乃原の人よりあへうゝも石ちゝ れをれるのわ
きわちん 一書云あとき物しひんつゝもひきゝ

今掘依綱い子髪をこしふ物し綱羅の宮云ゝとき
刺と 凡依綱原云ハ雲御物云美濃國也云云
古衣又打 同集第六巻石上乙麻呂配土佐國之時歌 上略 之
あり衣まち山あり久をこぬうゝ 仙覚云中ちと云
ゝ中うゝと云よかゝハまいをのわゝ 下略 今掘ちち
歌 当集又打と云ゝ打ハ搗也同集第十二巻寄物陳思
ハ位ちゝ決きゝ ゝきぬとよあゝひちゝ山ゝと川ハて
ハ位ちゝ決きゝ 是又ちゝ衣又うちきゝあゝ
ハへゝ 内よハ三ちゝどゝ也きゝあ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan